

Message from Prof. Kuroda



千住真理子さんが弾くストラディヴァリウスを聴いて、魂が揺さぶられた。荘厳で、哀しく、美しい。カッチーニの「アヴェ・マリア」、パガニーニの「ラ カンパネラ」。わずか10m先で、幻の名器と孤高のヴァイオリニストが一体となり、小宇宙を創り出している。私の想いは時空を超えて彷徨った。

ストラディヴァリウス・デュランティ。巨匠アントニオ・ストラディヴァリが1716年に製作した名器中の名器である。ローマ教皇クレメンス14世に捧げられたが、その後フランス貴族のデュランティ家やスイスの公爵家に保管され、約300年間誰にも弾かれることなく眠り続けていた。運命に導かれるようにそれが彼女の手元に渡る奇跡や、彼女を支えた家族の深い心の絆は、『千住家にストラディヴァリウスが来た日』(新潮社)に鮮やかに描かれている。千住真理子さんは慶應文学部哲学科の卒業生であり、父の千住鎮雄氏は慶應理工学部の教授であった。誇らしく、嬉しい。

芸術と科学。その縁は深い。芸術と工学はどうだろうか？工業製品の経済性を追究してきた私はコスト・パフォーマンス以外の価値に密かに心惹かれる。実験データによる性能比較ではなく、審査員の感性によるコンテストで技術の優劣を決めたら、芸術に少しでも近づけるのだろうかと考えたこともある。工学は、科学で解明された真理を社会が活用できるように噛み砕き、大量消費して経済を回す。一方芸術は、人の魂の叫びを表現する。はかない命だからこそ、永遠の輝きを放つ。

ストラディヴァリの技術は歴史の中で失われ、音色の秘密は現在の科学でも未解明な点が多い。芸術の息吹によって命を授けられたヴァイオリンは、芸術家と共に歴史の荒波を生き抜いていく。そんな芸術品の創作に心惹かれたいわけではない。1兆個のトランジスタを使いこなす工業技術にも畏敬の念を抱くが、時空を越えて人々の魂を揺さぶる創作も凄い。

モノの値段は、大衆品から高級品まで3桁ほどの幅がある。ヴァイオリンも数10万円から数億円まである。宝飾品もワインもピンキリである。1桁の違いまでは実感できるが、それ以上になるとため息しか出ない。しかし、芸術家はその価値を私たちにも分け与えてくれ、少しだけ分かった気にさせてくれる。

至福のときであった。世俗的な言い方を許していただけるなら、「最期に食したいものは？」と訊ねられたとき、「最期にもう一度あの演奏を聴きたい...」と答えることができるしあわせであろうか。

私の今のテーマは、コンピュータのフォンノイマンボトルネックの解消である。さらに、フォンノイマン型でない新しいアーキテクチャの探究である。手のひらに載る人工知能を創り出したとき、どのような感動が待っているのだろうか。

2016年12月 黒田忠広